

建設トッププラン
ナード倶楽部 福島県を視察研修

インフラの町医者と複業化を目指す経営者が集まる建設トッププランナード倶楽部(米田雅子代表幹事)は、5月30日と31日の両日に福島県の視察研修会を開催し、山間地で地域を支える仕組みづくりに関心地域建設業の取り組みや、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故で大きな被害を受けた沿岸地域での復旧・復興作業の模様を視察した。

山の力で地域を支える

米田代表幹事をはじめ約40人が研修に参加。初日は奥会津地域・三島町の佐久間建設工業(佐久間源一郎社長)を訪問した。森林面積が86%を占め、過疎・高齢化に悩む山間地域に拠点を置く同社は、地域維持型JVのモデルとして知られる宮下地区建設業協同組合の中心的存在であるほか、森林資源などの「山の力で地域を支える仕組みづく



清匠庵で社長の話を聞く参加者



被災時のまま雑草が生い茂る富岡駅

どの取り組みを紹介した。引き続き、空き家となった家をIT企業の開発拠点に作り変えた「清匠庵(せいしやうあん)」も見学。施設は、古民家の風情を残しつつ内・外装を新しい木材に更新。台所やトイレは最新の設備を取り入れた。ビットグデータ解析を専門とする誘致企業「株式会社t.o.o.r」の高杖佳男社長は「来訪したビジネスパートナーの10割が満足して帰る」と説明した。

2日目は浜通りに移動。檜葉町の「道の駅ならば」で、NPO法人ハッピーロードネットの西本由美子理事長から避難生活を送る双葉郡の現状について講演を聞いたほか、帰還困難区域と居住制限区域の境界にまたがる富岡町、いわき市沿岸部の復旧現場などを視察した。

講演した西本氏は、高速道路の整備促進を求めするため(地方建設専門紙の会)

「常警道を応援する女性の会」の取り組みから、震災以前における同法人の活動の経緯を説明した上で、原発事故の影響の大きさを強調。「世界一素晴らしい地域にしたい」との思いで進めている「ふくしま浜街道核プロジェクト」を紹介した。参加者に「避難先から戻って頑張っている人もいる。自分の目で見て、肌で感じて、正しい情報を伝えてほしい」と求めた。

富岡町では、帰還困難区域との境界バリケードや商店街、津波被害で壊滅したJR富岡駅を視察。いわき市では、全壊したもののいち早く再建した「道の駅よつぐら港」や新舞子海岸、豊間中学校、塩屋崎灯台等を視察し、災害公営住宅豊間団地新築工事現場を見学した。山木・加地和特定JVの高崎満宏現場代理人が工事概要を説明した。質疑応答では専門工や資材の調達状況、工期等について質問が出され、PC造の採用や内装のプレハブ化により、合計192戸が約15カ月工期で完成する見通しを報告。中央台高久地区の応急仮設住宅群、小名浜港も視察した。